

海蔵あくら



四日市市立海蔵小学校
校長室だより
令和5年6月8日
第3号
文責 校長 柳川 洋史



ピンクシャツデー

「校長先生もピンクを着ている…」

高学年の授業視察をしていた時に、つぶやきが聞こえてきました。そのクラスでは、道徳で「いじめ」について考えあい、「ピンクシャツデー運動」について学んでいたのです。

その「ピンクシャツデー運動」とは、カナダから始まりました。



舞台は 2007 年、カナダ・ノバスコシア州のハイスクールです。

9 年生（中学 3 年生）の男子生徒がピンク色のポロシャツを着て登校したことをきっかけに、からかわれ暴行を受け、たえきれずに帰宅してしまいました。

その出来事を聞いた上級生のデイヴィッド氏とトラヴィス氏。12 年生（高校 3 年生）の彼らにとっては、その学校で過ごす最後の年でした。

「いじめなんて、もう、うんざりだ！」

「アクションを起こそう！」

そう思ったふたりは、その日の放課後、ディスカウントストアへ行き 75 枚のピンク色のシャツやタンクトップを買いこみました。

そしてその夜、学校の掲示板やメール等を通じてクラスメートたちに呼びかけました。

「明日、一緒に学校でピンクシャツを着よう」

翌朝、ふたりはピンク色のシャツやタンクトップを入れたビニール袋を手に登校しました。

学校について校門で配りはじめようとしたふたりの目に映った光景・・・

それはピンクシャツを着た生徒たちが次々と登校してくる姿でした。

ピンクシャツが用意できなかった生徒たちは、リストバンドやリボンなど、ピンク色の小物を身につけて登校してきました。頭から爪先まで、全身にピンク色をまとった生徒もいました。

ふたりの意思は一夜のうちに広まっていたのです。

ふたりが呼びかけた人数より遥か多く、数百人もの生徒たちがピンクシャツやピンク色のものを身につけ登校してきたことで、その日、学校中がピンク色に染まりました。

いじめられた生徒は、ピンク色を身につけた生徒たちであふれる学校の様子を見て、肩の荷がおりたような安堵の表情を浮かべていたそうです。以来、その学校でいじめを聞くことはなくなりました。

いじめに対して、学生たちは言葉や暴力ではなく行動で意思表示をしようと立ち上がったのでした。

カナダの学生たちが起こした行動が地元メディアで取り上げられると、瞬く間にカナダ全土へと広がり、アメリカのトークショーやスペイン最大の新聞でも紹介されるなどして、世界へと広がっていきました。メディアで彼らのことが紹介された翌日には、アメリカ、イギリス、ノルウェー、スイスから彼らの元へ多数の賞賛や感謝を伝えるメールが届いたといい、大きな反響が伺えます。この行動がきっかけとなり、現在、カナダでは毎年2月最終水曜をピンクシャツデーとし、この日、学校・企業・個人を含めた賛同者がピンクシャツを着て「いじめ反対」のメッセージを送っています。

海蔵小学校児童アンケート結果によると、
「いじめや差別はどんな理由があってもいけないと思いますか？」
の設問に対し、98%の子どもたちが「どんな理由があってもいけないと思う」と答えています。頼もしい限りです。



しかし、海蔵小でいじめが発生していないかというそうではありません。人を傷つける言葉が出されたり、仲間外しが見られたり、SNSの中でも…。「いじめはいけない」と、言葉ではわかっているのに。

人は誰も正しいことを知りながらも、そのように行動できず、我儘が表に出てしまう弱さを併せ持っているのかもしれない。

だからこそ、子どもたちも私たちも、常に学び続け、自分を顧みることを続けていかなければならないのではないのでしょうか。

先日「海蔵地区人権・同和教育推進協議会総会」に参加しました。

この会は、「誰もが自由で、対等・平等な社会をつくるため、一人ひとりが互いに相手を尊重し合うことができる豊かな人権感覚を培い、差別のない明るく住みよい人権尊重のまちづくりを推進するため」に地域の方が尽力されているものです。

総会の場でも、参加されていた方々と共に、世界人権宣言に関わり、様々な人権について学ぶ場が設けられました。「女性の人権」「子どもの人権」「障がいのある人の人権」「外国人の人権」「部落差別解消推進法・障害者差別解消法・ヘイトスピーチ解消法」等々。

中でも、小学校として「子どもの人権」に関わり「いじめ」をなくす取り組みを進めていかなければならないと改めて感じさせられました。

今年度も全ての学年において、道徳等で、「いじめ」に関わる教材文を読み深め、自分自身と重ねて考える機会を設けていきます。つらい気持ちの学生に寄り添ったピンクシャツ運動の仲間のように、「いじめをしない」だけでなく、「いじめをなくそう」と行動できる力をめざし。海蔵小学校の子どもたちが、もう一步成長できるように教職員一同取り組んでいきます。

